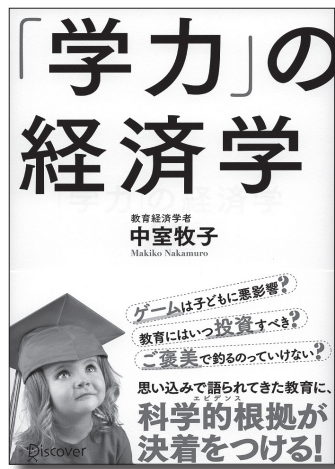


中室牧子著

## 『「学力」の経済学』

デイスカヴァー・トゥエンティワン、二〇一五年



今年六月、『学力』の経済学』（以下「本書」と）『幼児教育の経済学』という二冊の教育に関する図書が相次いで発売された。刊行順に、それぞれを今月号と来月号で紹介したい。

本書は、教育のなかでも「学力」の「経済学」を取り扱う。章構成は、一章「他人の『成功体験』はわが子にも活かせるのか?」、二章「子どもを『ご褒美』で釣ってはいけないのか?」、三章「勉強」は本当にそんなに大切なのか?」、四章「少人数学級」には効果があるのか?」、五章「いい先生」とはどんな先生なのか?」と身近な問題が並ぶ。

本書は（来月号紹介予定の『幼児教育の経済学』も）直接的には途上国研究書ではない。しかし、途上国における教育開発分野にも、本書が重視する科学的根拠を求め考へる方が急速に浸透しつつあるように思われる（雑誌二〇一四年二月号〈No.230〉特集をも参照）。その意味で途上国の教育を

証手続きに基づく教育の議論の重要性を強く説いている。一四ページで『教育は「一億総評論家」といみじくも表現されているように、教育は、医療や金融といった専門知識の参入障壁がある分野と異なり、老若男女を問わず誰しもが『一言ある』分野である。しかし、例えば、「他人の成功体験を子どもに間かせるのがよいか（一章）」、「ご褒美で釣ってでも勉強させたほうがいいか（二章）」、「少人数学級の学校に進学させたほうがいいか（四章）」、「大学受験前は部活をやめて受験勉強に多くを費やすべきか（三章）」、「教員の質とは何か（五章）」といった問いに厳密に答えることは容易なことではない。しかも、すでに耳にしたことのある議論は、ひよっとしたら某人の

経験に因る栄えある逸話<sup>アヌドット</sup>だけかもしれない。この点で著者は、徹底的に科学的根拠に依拠して、そこから導き出されてきた教育経済学の研究成果に基づき、各章の問いに対する示唆や議論を著述している。

それら詳細な内容については、実際に本書を手にとつて答えを読み進めていただきたい。本稿では紙幅の都合により、選択的に以下の三点に絞つて本書の特徴を紹介したい。

第一に、なにより教育に悩みを抱える親、子本人、あるいは現役教員にとつて指南書たる点を挙げたい。例えば「勉強しなさい」とつい口にしてしまふ親の立場にある読者は第二章を、受験を控えて部活動をやめようか悩んでいる生徒あるいはそうさせようとしている親や教員の立場にある読者は「非認知能力」の重要性を説く第三章を熟読していただきたい。また、教員に将来なりたい学生は、第五章で科学的根拠を通じて教員免許や教員の質について考える契機を得るだろう。

第二に、一般書のソフトさを維持しつつ、専門書的なハードさが適度に織り交ぜられた「橋渡し」的性格を特筆したい。特に紹介者が感服したのは、一八六ページ「参考文献」に登場する九九個の脚注である。この脚注は教育経済学<sup>カクワイ</sup>界隈の主要文献から最新の国際ジャーナル論文までがリファアー紹介されている。そのなかには途上国関連の先行研究も少なくない。脚注だけでも、著者による「学力」に関する

教育経済学や実証経済学全体の先行研究の精緻なレビューの恩恵を得ることができ、同時に本書執筆の堅固な礎が窺える。末尾に小さく佇むからといって、脚注部分は見過ぎすのはもったいない専門学習ガイドでもある。

そして最後に、教育経済学の啓蒙や本書自体の教育的特徴を挙げたい。教育経済学は海外では確立した分野だが、日本では他の応用経済学に比べると相対的に扱いは少ない分野と思われる。また、どちらかというと労働経済学や公共経済学、行財政論のアプローチで教育の外部効率性を主たるテーマとしていた感もある。その意味では、「学力」（特に認知能力に加え非認知能力）に焦点を当てて、教育の内部効率性の問題を中心に据え、一貫性をもつて議論が展開されている。さらに、補論「なぜ、教育に実験が必要か」も見逃せない。補論単独でも実証研究の要諦が詰まった論考となっている。脚注や補論からも著者の執筆姿勢の徹底ぶりを感ぜさせられ、本論はもちろんのこと、看過されがちな脚注や補論にまで教育的配慮が及んでいる点も大きな特長である。さまざまな立場にある読者に手にとつていただきたい一冊である。

（おかげ、まさよし／アジア経済研究所 出版企画編集課）